

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 63-1151

会長：宗田 市太郎 幹事：平尾 信明

情報委員長：清水 忠

1977・1月20日

第82号

現代老人考

——老人に光を——

陽風園園長 山腰 大樹氏



人類の歴史をふりかえって見ると、老人を殺した“殺老時代”やいわゆる姥捨ての“棄老時代”が非常に長く続いた。

今日のように、年寄りを養う“養老時代”に入ったのは、ほぼ5500年前からと言われている。

そして、現在多くの人々から身のよりどころとされているキリスト教、仏教等の宗教が、皆々の養老時代の老人に対する思想を原点に持っているということも事実である。

ところが残念なことに、殺老から養老へという大きな歴史の流れを無視して逆流しているというのが、今の日本の状況である。

原因はあの未曾有の大戦、そして敗戦の異常な体験であった。

具体的に掲げてみると、日本の社会の高齢化、家族制度の崩壊、新興住宅地の設計法による老人のしめ出し等である。

更には、貨幣価値の急激な変動、終身雇用制による定年後再就職の困難、加えて国家としての老人対策のたちおくれ等々、これらのハンディキャップを背負って、老人達は長らくの苦労にもかかわらず、社会からとりのこされた寂しい生活を送らざるを得なくなったのである。

経済的には谷間へ落ち込み、病気にはなる、子供は省みない、こういった状態を見るにみかねてか、昭和38年には世界で初めての「老人福祉法」なる法律が施行された。

老人の健康と生活を守り、老人を敬もうというのが本来の目的であった。

しかし、この法律によって老人に対する責任が、子から国や地方公共団体に転嫁されたということも否めない事実である。

現在私は一老人ホームの園長を務めているが、入園中のお年寄りは、比較的元気な人が240名体か心が悪い、いわゆる寝たきり老人と言われる人360名の計600名である。

年令別に見ると65才から70才が一番多く22.5%を占める。

次は75～80才で20.5%、少ないのは90才以上で7%、平均が76.5才である。

“Service” I believe in Rotary

普通65才からを老人と呼ぶが、統計を見るとこのように“若い老人”の入園者数が非常に多いのである。

次に、ホームにいる期間を調べてみると、1年から3年の人が4割を占め、5年以上は1割にも満たない。

大ざっぱに言えば、入った人は3年以内に3割が亡くなってしまふということである。

経済的には、1万5千円程度の老齢福祉年金を貰っている人が80%、2万円以上の収入を持つ人は4%にすぎない。

次に、重大な問題として肉親のことであるが、9年前の調査では6%もなかった「子持ちの老人」が、今ではなんと48%、半数に増えているということがある。

扶養すべき親がありながら、老人ホームにまかせ切りの子が半数もいるということである。

その他何らかの形で身寄りのある人は43.8%、全然身寄りのない老人は7.8%、こういう実情である。

病気、身寄りが無い、家族との不和、経済的破たん等、個々の入園した理由は我々に社会の一断面を見せつけるかの様である。

病気では、循環器、消化器、呼吸、血液、神経系の順に多く、病院で病状が固定したものの家庭に引き取られず入園したケースが大部分を占める様になってきた。

老人の精神的な面にもメスを入れてみると、先ず一番喜ぶことは何か。

生理的な欲求つまり衣食住、慰安、娯楽の要求と答えた人が一番多く、次には病気に対する安全、3番めには周囲の親切、愛情を求めている。

4番めには人から敬われたいという欲求、5番めには自己実現の欲求となっている。

私が実際預って見て、肉親の訪問をいちばん喜ぶのである。

一口にいえば、老人達はどんなに衣食住が完備していようとも、自分達はもう見離されてしまつて誰も自分を思ってくれる人がいないということが一番寂しがるのである。

私は昨年、96の葬儀を主催したが、その中で一人でも故人を悼んで泣いた人のいる葬式はと見ると、一件もなかった。

死んでも、誰にも泣いてもらえない、泣ける人がいないというこの寂しさについて考えざるを得ない。

今、私のホームでは、全力をあげて兼六園の清掃奉仕を行なっている。

自分たちのいることが、社会の為に役だっている、という状態に老人を置くことが、何よりも大きな老人福祉なのである。

何もしなくてもいい、休んでいろ、と言うのは、最も残酷なことなのである。

小さなことでもいい、仕事を分担してやり、私もまだお役にたっている、という気持ちにさせることが大変大事なことなのだ、私は思っている。

又、老人に対しては、相手になって話をしてやることが大切である。

過去に生きている老人の、一番得意とした時代のことを聞き出し、何回でも聞いてやる。

このことが大変大事なことである。

即ち、老人は、枕元において自分の話を聞いてくれる人の存在を喜ぶ。

“奉仕” ロータリーを私は信奉する

又、老人は、死に対する恐怖のあまり宗教に対する関心も非常に強い。

私が月に2回程開く各宗派の講話も、非常に熱心に聞いている。

老人にも、一日一日を感謝合掌で過ごす人、毎日不平不満ばかり言っている人等タイプはさまざままで、難しい存在ではあるが、皆不安や寂しさは一つである。

最後に、私がホームを尋ねて来る老人会の方々に必ず言っていることがある。

それは、「どんなに設備が整い、おいしいものを食べられるといっても、ここへ入ろうとは決して思ってくれるな、生活がいかに窮屈であろうとも、自分の肉身にとり囲まれて家の中で老後を送ること程幸せなことではない。」ということである。

会員の方々でも、老人を抱えている方は、どうか最後迄家で面倒を見て頂きたい。

それが最大の老人福祉だと、私は信じているのである。

親というのは立木を見ると書くが、親、年寄りというのは木で言えば根であって、この根にしつかりと肥料を与えた者は枝葉が栄える、というのは、宇宙の真理であって、どんな親であろうとも年寄りを大切にすることとは、決して同情や憐れみではなく、人間として天地の法則に従った大道なのである。

従って、機会あるごとに年寄りを大事にするということは、我身自身が栄えていくということであり、歴史も事実も例外なくこれを示している。

私は自分の老人ホームに希望者が多いということ、少しも嬉しいこととは思わない。

陽風園にはこの傾閑古鳥が鳴いている、といった状態が一番望ましいのである。

日本には老人福祉法が要らない、という状態こそ、老人福祉法のねらいである、そう私は思うのである。

(金沢北RC例会卓話要約)



〔附記〕

この話は、会員の職場や家庭の人にも読んで貰って下さい。

新入会員紹介

(新たに仲間となった人たちです。おめでとう。) 1月5日

職業分類	氏名	事業所・役名	事業所所在地・電話	自宅住所・電話	生年月日	推薦者	委員会
染色補正	二木正樹	二木調整店主	金沢市東山3丁目11の7 TEL 52-7396	左に同じ	1918年 8月28日	吉田昭炳 水野博	親睦
刑事弁護士	沢田哲夫	沢田哲夫法律事務所所長	金沢市兼六元町1の31 TEL 22-2881	金沢市長町3丁目6の18 TEL 21-6214	1909年 8月3日	宗田市太郎 清水忠	企画
不動産貸付	上田忠信		金沢市山ノ上町34の27 TEL 52-3762	左に同じ	1928年 11月22日	越野民男 岡田林太郎	例会

